エルムの丘

佐伯千秋

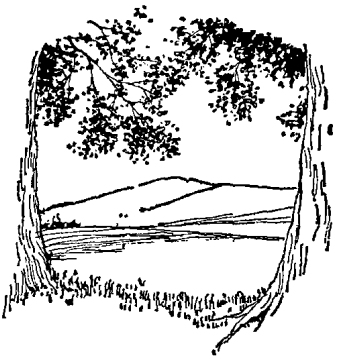
COBALT·BOOKS

エルムの丘

佐伯千秋

COBALT·BOOKS

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com



エルムの丘

佐伯千秋

集英社

エルムの丘

定価はカバーに表示してあります　0393—663015—3041

昭和42年10月10日　初版発行
昭和49年7月　8版発行

著者　佐伯千秋
発行者　陶山巌
印刷所　大文堂印刷株式会社
錦印刷株式会社

発行所　東京都千代田区一ツ橋2—5—10 郵便番号 101　株式会社 集英社　電話東京(265)代表6111 振替東京 15653 番

© 1967 PRINTED IN JAPAN　著者と了解のうえ検印を廃止します

エルムの丘

第一部　みどりの巻

高原の道……13
花びら……25
エルムの木陰……32
銀と黒……42
小さな悪魔……56
風の中の白い紙……69
神の湖……84

第二部　深紅の巻

春の風……93

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

つるバラの家……104
花と詩と雨……110
夏　雲……120
聖マリア病院……139
心の誇り……144
愛と祈り……155

仮面の天使

日がさ……175
仮面の少女……181
告　白……192
そのひと……203

第一部　みどりの巻

高原の道

「オーライ……オーライ……」

いちめんもえぎの色におおわれた高原に、さあっと早春の風が吹く。その風に、しゃんしゃんと鈴の音をひびかせながら、一台の馬車が進んできた。後ろにまぐさを積む箱型のわくのついた、そまつな馬車で、手編みの帽子をかむった少年が、御者台でむちを振っている。

「お嬢さん、風が暖かくなったね。雪がとけるとすぐ春だ。おいら、今ごろがいちばん好きだな。馬車を走らすたんびに、空の色も、野っぱらの色も明るくなってるんだもの。」

少年が、丸い目を輝かせてふり返った。馬車のふちに腕をのせて、春風にさらさらと髪をなびかせていた少女が、にっこりうなずく。白い頬が朝日に染まったようにばら色で、微笑をふくんだ口もとが、さくらんぼをくわえたように愛らしかった。

「これから毎日、桂ちゃんの馬車でこの道を通うのね。いつもけさのように晴れていたら、楽しいでしょうね。」

少女の名は、北見未穂。はてしなくひろがるこの北海道の高原の牧場の娘で、S市の第一高等学校の入学式に急ぐところだった。むちを振っている桂太は、北見牧場の牧童。

未穂は桂太の馬車で高原の駅まで送られ、そこからS市まで汽車通学をするのがうれしかった。なんとなく、すいと背のびをしておとなになれたような気がする。

——高校生活って、どんなのかしら?……

もえぎの春の野に目を向けながら、さっきから未穂は、白いスクリーンを前にして立ったように胸をはずませていた。そのまっ白い画面に、これからどんな未来が描きだされるのかしら?……

春がきた　春がきた　どこにきた
山にきた　里にきた　野にもきた……

桂太が口笛を吹きだした。北見牧場で牛や馬の世話をするかわりに、きょうからは、美しい未穂を送り迎えする役めをいいつけられたのが、桂太にもうれしいのだ。

「お嬢さん。帰りは二時の汽車だっていったね。おいら、二時前から駅にでてるよ。」

桂太がひとむちあてながら、叫んだ。

馬車は、口笛と鈴の音の合唱の中を軽やかに進んだ。ところがそのとき、桂太の口笛が、突然、止まった。

「しまった!」

「どうしたの？」
「ちぇっ。車が、ぬかるみにはまりこんだらしいや。」
桂太は馬車からとびおりると、馬車の下をのぞきこんだ。少々はしゃぎすぎて、たづなを持つ手がおるすになったらしい。片方の車が雪どけあとのぬかるみの中に、ぐっと深くくいこんでいた。
「ドウ、ドウ……」
桂太は馬の首すじをたたきながら、馬車をぬかるみから引き上げようとした。けれど、馬のひづめはいたずらに地をけるだけで、車はいっそう深くどろの中に沈んでいった。
「困ったな。早くしないと、七時の汽車にまにあわなくなるのに。」
ぐいっ、ぐいっ、とたづなを引く桂太の頬がまっかだ。入学式に遅れるかもしれないと思うと、未穂も心細くなって、馬車から降りると、桂太と力を合わせて馬車を押してみた。馬車は、びくともしなかった。
「どうしましょう？……」
「弱ったな……」
未穂と桂太が顔を見合わせたときである。
「カッカッカッ……」
朝風の中に、軽い駆足の音がひびいてきた。
「あっ、馬車よっ。」
街道のかなたから、朝風をきって進んでくる一台の馬車が見えた。

「あの馬車にお願いして、駅まで乗せてってもらうわ。」
すると、未穂と並んでじっと近づく馬車をみつめていた桂太が、まゆをしかめて首を横に振った。
「だめだ、お嬢さん。ごらんよ。黄色い馬車じゃないか。」
「黄色い馬車だと、なぜだめなの？」
「お嬢さんは知らないんだね。丘のずっとむこうに、新しい美沢牧場ってのができたのさ。おいら、羊を追いながら行ってみたことがあるけど、夕日のさしているときなんか金色に光って見える黄色いおやしきなんだよ。黄色い馬車は、あの家のお嬢さんが乗りまわしている馬車だよ。おいらがつれている小羊の群れの間を、あの馬車が、幾度もつっ走っていった。あのお嬢さんなんか、乗せてってなんかくれるもんか。」
「でも、困ってるわけをよく話してみたら……」
そう話し合っているうちにも、馬車はみるみる近づいてきた。遠乗り用に作った軽快な四輪馬車で、たくましい黒い馬がひいている。御者台には、ひとりの少女が細いむちを光らせていた。少女の目も黄色で、長い髪が、その肩に、背に、黒い炎のように吹き流れていた。黄と黒だけの、あっと目を見はるような対照が荒野を背景にして、あざやかに浮きだしていた。
「あの、お願いですの……」
黄色い馬車がすぐ目の前に迫ってきたとき未穂は一歩進んで声をかけた。少女の黒いひとみが、一瞬、未穂を見た。……けれども馬車は、止まりはしなかった。高いひづめの音と、軽快な車のひ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com